

有明海沿岸道路 筑後川・早津江川橋梁

第1回 設計検討委員会



基本設計に関する打合せ経緯

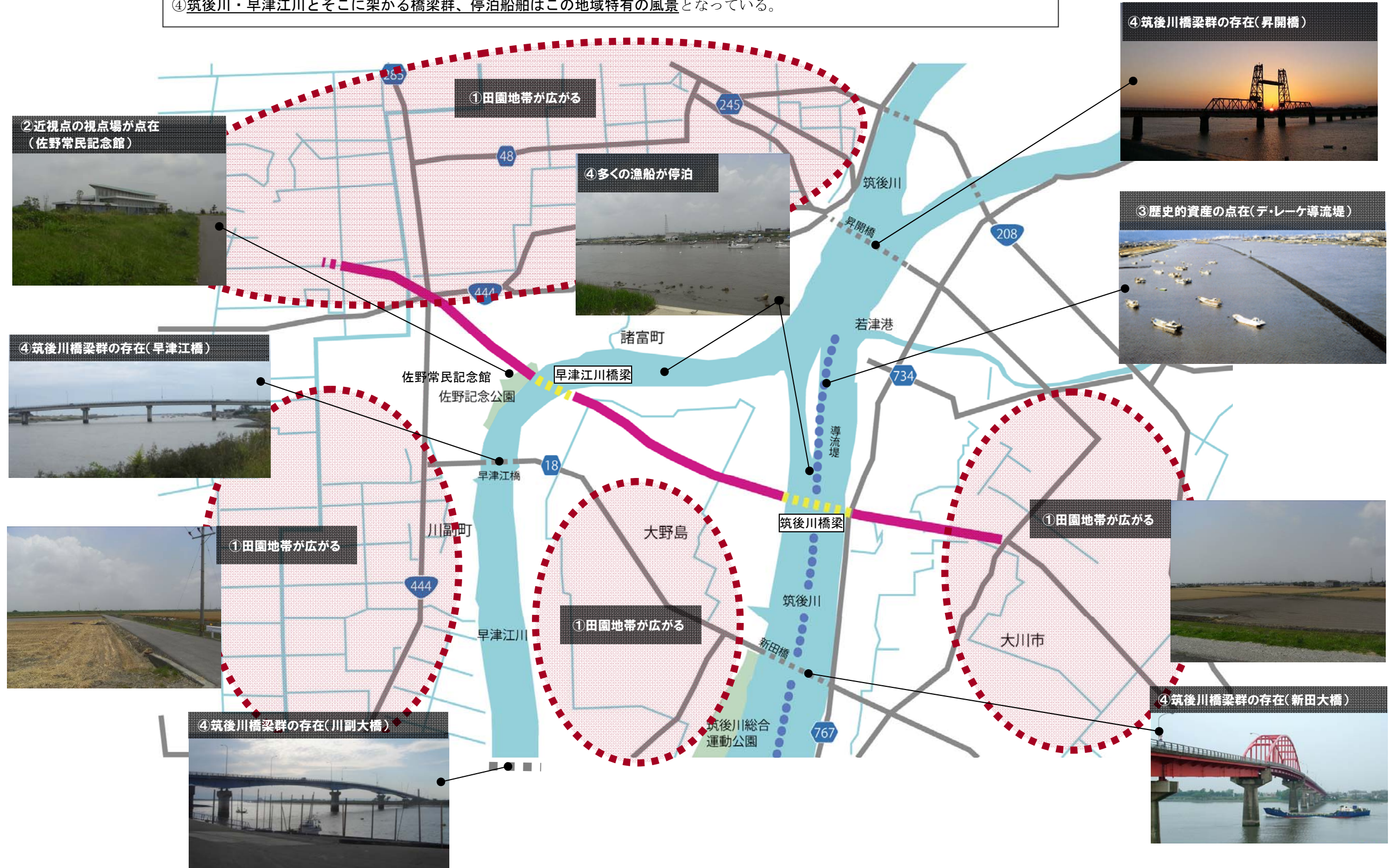


1-1.「基本設計に関する打合せ」での整理事項

(1) 景観特性

【景観特性】

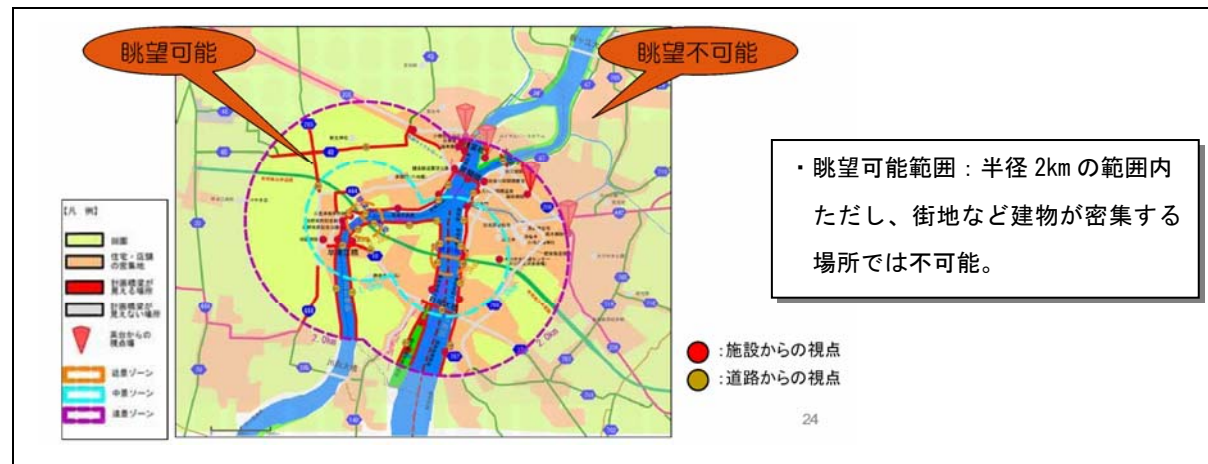
- ① 田園風景が広がり、周辺に視界を遮る建造物が比較的少ない。
- ② 堤防道路や集落、佐野常民記念館、病院、また停泊船舶など、近景の視点場も多い。
- ③ 景観性を検討する上で、周辺の歴史的遺産（デ・レーケ導流堤、昇開橋、三重津海軍所跡地など）は重要な要素となる。
- ④ 筑後川・早津江川とそこに架かる橋梁群、停泊船舶はこの地域特有の風景となっている。



(2) 主要な視点場

	筑後川橋梁		早津江川橋梁(遠景での特徴的な視点場は存在しない)	
近景 (0 ~ 0.3km)	【現況写真】 		【現況写真】 	
	【VR】 		【VR】 三重津海軍所跡	
中景 (0.3 ~ 1.0km)	【現況写真】 		【現況写真】 	
	【VR】 筑後川橋梁 デ・レーケ導流堤		【VR】 早津江川橋梁 三重津海軍所跡	
遠景 (1.0 ~ 2.0km)	【現況写真】 		共通の視点場	
	【VR】 筑後川橋梁		【現況写真】 	
			【VR】 筑後川橋梁 早津江川橋梁 昇開橋	

■眺望可否範囲



- 当該橋梁の周辺は、田園風景が広がり、周辺に建造物が少ないため、橋梁のプロポーシオン全体を視認されやすい。
- また、橋梁周辺には、堤防道路、周辺集落、公園（三重津海軍所跡）、停泊船舶など、多くの近景視点場が存在するため、橋梁細部構造までが視認される。
- 当該橋梁の周辺には、昇開橋、デ・レーケ導流堤、三重津海軍所跡といった、歴史・文化資産が点在し、それら資産と橋梁が風景の中に同時に見られる視点場が多く存在する。

(3) 歴史遺産に対する考え方

<p>若津港導流堤 (筑後川デ・レーケ導流堤)</p>	<p><概要> (出典：大川市)</p> <ul style="list-style-type: none"> 有明海は干満の差が約6mと大きく、潟土が堆積しやすく、明治時代の重要な輸送手段である船舶輸送を妨げる事が多かった。そのために、河口から上流約6キロまで筑後川の中央部分に石組みの長大な堤を築き、1890年に完成した。 導流堤の完成から100年以上経った現在もその役割を果たしており、また嵩上げ工事や埋め立て工事などされておらず、竣工時の姿を良く残している。 社団法人土木学会の2008年度「選奨土木遺産」に認定された。 <p><景観特性></p> <ul style="list-style-type: none"> 筑後川流域では治水・利水の文化的遺産も多く見られ、デ・レーケ導流堤等は、有明海の干満の差と航路確保を目的に整備され、周辺の景観と一体となって美しい治水文化を継承する文化遺産的な景観の一つである。(過年度報告書より) 		<p>写真1:若津港導流堤(デ・レーケ導流堤)</p>
<p>三重津海軍所跡</p>	<p><概要> (出典：「三重津海軍所跡パンフレット」 佐賀市教育委員会 2011年3月)</p> <ul style="list-style-type: none"> 1858年に日本最初の海軍所である「御船手稽古所」を設立した。 実用的な国産初の蒸気船「凌風丸」はここで建造された。 三重津海軍所跡は、幕末佐賀藩の造船建設等科学技術の象徴として、海軍の礎を築いた地として、歴史的な価値の高い場所である。 発掘調査では、木造建築物跡や金属加熱炉、階段状のドック木製護岸などが発掘された。 日本の在来技術と西洋の最新技術が融合し、三重津海軍所、蒸気船等が作られていった。 <p><景観特性></p> <ul style="list-style-type: none"> 海軍所跡地の上流側エッジの部分に架橋されるため、海軍所跡地と一体的に見られる。 		<p>写真2:三重津海軍所跡位置図</p>
<p>昇開橋</p>	<p><概要> (出典：財団法人 筑後川昇開橋観光財団 HP 等より)</p> <ul style="list-style-type: none"> 昇開橋は、単線仕様の鉄道橋として建設され、昭和10年に竣工。 昭和6年には、鉄道路線が廃線となり、大規模な整備工事を経て、平成8年に遊歩道として生まれ変わった。 平成8年に国登録文化財、平成15年には国指定重要文化財に指定された。 平成19年には(社)日本機械学会より機械遺産に認定された。 昇開橋の通行者数は約7万人/年であり、大川市の観光客数(約70万人/年)の1割程度を占める。 <p><景観特性></p> <ul style="list-style-type: none"> ライトアップ、花火、ウォークラリー、写真コンテスト等、貴重な観光資源として、地域の人々から愛されている。 昇開橋からは、筑後川橋梁が眺望できる。(早津江川橋梁からは、ほとんど視認できない) 		<p>写真3:昇開橋と蒸気機関車</p>

- 導流堤は砂の堆積を防ぎ、航路確保や流下能力確保することを目的としている。その機能や歴史を踏まえると、橋脚は河川内ではなく、導流堤幅内に設置することが望まれる。
- 今も土木施設として有益に働いているデレーケ堤に対し、ある程度手を加えるのは可能とするが、我々が尊敬の念を持っていることが表れる形態にする。

- 近代的なものづくり発祥の地として、産業文化の継承や近代日本を開くチャレンジスピリットを感じさせる。
- 世界遺産に動き始めた三重津海軍所跡地に対し、周りの風景に負担をかけないようにスレンダーに邪魔しないように“すっと”跨ぐデザインにする。

- 昇開橋と筑後川橋梁、新田大橋はセットで見られやすいことから、橋梁群としてのまとまりに配慮することが望まれる。
- 地域の重要な観光資源であり、かつ写真の被写体として撮影されることから、大きな主塔等で昇開橋への眺望を阻害することは避ける。

3つの歴史遺産をリスペクトした橋にする

(4) デザインコンセプト

	現状の把握	コンセプトの要素
橋梁の位置づけ	・計画橋梁は福岡・佐賀の県境に位置し、九州最大の筑後川を渡河する橋梁	・雄大な筑後川とマッチしたシンボリック要素を有し、有明海沿岸道路における代表的な橋梁、県境のゲートの橋梁が望まれる
風景	・架橋位置周辺は雄大な筑後川を中心とした河川景観とのどかな田園風景が低層で展開する	・低層で展開する風景を阻害しない橋梁が望まれる
住民の視点	・架橋位置の流域はエソ漁・海苔養殖を営む漁業域 ・河川沿いは住民が散策を楽しむ身近な水辺空間	・近景からの見え方に配慮し、圧迫感、威圧感を極力回避し、洗練されたシンプルなデザインが望まれる
周辺資源	・架橋位置周辺には昇開橋、若津湾導流堤、三重津海軍所跡などの歴史的遺産、景観・観光資源が点在	・景観・観光資源の現況に配慮し、景観的影響の小さい橋梁が望まれる

基本的な考え方:「調和とシンボル性を両立する橋を目指す」

上位計画(筑後川流域景観計画)

- ・筑後川は全長約 140km におよぶ九州最大の一級河川
- ・河口付近では干満差の大きい有明海が創り出した独自の地形を望むこともできる
- ・クリークと農地、集落からなる下流域特有の田園景観
- ・河口近くでの漁を終えた船が川面に浮かぶ光景も日々の営みとともにある景観のひとつ
- ・デレーケ導流堤は周囲の景観と一体となって美しい治水文化で文化遺産的な景観のひとつ
- ・筑後川昇開橋は役目を終えた今でも、歴史的遺産として多くの人々に親しまれる景観
- ・堤防道路等では川面を眺めながら自然の中を散策できる場として、多くの人々に親しまれている

◇全体デザインコンセプト<基本景観コンセプト>

「昇開橋、デ・レーケ導流堤、三重津海軍所跡をはじめとする既存施設に寄り添い、景観資源との調和を図りながらも洗練された質の高い橋」

◇周辺特性から求められる橋梁デザイン上の配慮事項

- ・水平基調の田園・河口景観に調和し、かつ、眺望を確保する。
- ・各歴史遺産の機能や価値を継承するため、遺産の改変を極力避ける。そして、建設当時の思いや地域の文化を後世に伝えて愛着を醸成する。

◇橋梁デザインに求められる基本事項

- ・機能的・構造的必然性に配慮し、構造物として力の流れる形態とする。
- ・橋梁群(河川軸、道路軸)としてのまとまりや関係性に配慮する。

筑後川橋梁

デザインコンセプト

「デ・レーケ導流堤や昇開橋と共に、筑後の水文化を継承する橋」

筑後川の水と土砂の流れを整え、船の航行を 120 年間確保し続けている近代土木遺産の若津港導流堤。これからもその機能を阻害することがないように、保全し、筑後の治水文化を継承していくことが我々に求められている。

そして、地域のシンボルである上流側のトラス構造の昇開橋と下流側のアーチ構造の新田大橋に間にかかる橋として、また、有明沿岸道路の九州第一の大河に架かる最大橋梁として、橋梁群の中で新しいシンボルのひとつとなる(ことも求められる)。

舟運と共存するため大型船の船舶の航行に配慮した昇開橋、土砂の堆積防止と船の航行確保のための若津港導流堤。そして、舟運を生かして発展してきた有明海岸地域のこれからの発展のために建設される筑後川橋梁。

「筑後の治水・舟運文化を現代に継承したシンボル」となる橋を目指す。

早津江川橋梁

デザインコンセプト

「三重津海軍所跡に馴染む、緩やかなラインが美しく見える橋」

国産初の蒸気船の製造を行い、鉄の鍛冶や銅の鋳物製造が行われた幕末の先進地である三重津海軍所。その外縁部に架橋され、歴史遺産と一体的に見られる橋となる。

日本の在来技術と西洋の最新技術が融合し、新しい日本の文化を力強く切り開いてきた、近代的なものづくり発祥の地の背後にかかる橋として、ものづくり技術の進歩した姿を、橋梁の構造美で感じさせつつ、必要以上に主張しないように三重津海軍所に寄り添うことが望まれる。

そして、筑後平野の水平基調の景観と調和し、「緩やかなラインが美しく見える橋」を目指す。